

高齢者の接種スタート

感染対策を緩めず、着実に

高齢者に対する新型コロナワイヤルスワクチンの接種が始まった。医療従事者以外で初のケースだ。

関西圏や首都圏などで感染拡大の「第4波」が広がっている。感染対策を緩めることなく、接種を着実に進めたい。

対象は65歳以上の約3600万人だ。2回の接種が終わるのは8月ごろと見込まれる。

重症化リスクが高い高齢者にワクチンが行き渡れば、医療現場の負担軽減につながる。

だが、これだけ大規模な接種は前例がない、自治体にはノウハウの蓄積がない。

第一陣の配分は供給量が限られ、集団接種の予約が殺到して電

話がつながらない自治体がある。話がつながらない自治体がある。た。高齢者施設では接種券が届いた人と届いていない人がおり、不公平にならないよう接種が先送りされる例もみられた。

接種が本格化する5月以降に向けて、沸りなく進められるよう体制を整えなければならない。

それまでの経験を生かし、集団接種会場での手順や、接種情報登録システムの改善につなげることが重要だ。

国や都道府県は改善点を洗い出し、対処方法と併せて市町村に周知してほしい。

政府は、自治体が余裕を持って準備を進められるよう、ワクチンの供給スケジュールを早い段階で

示すべきだ。

医療従事者の確保も課題だ。接種準備で、薬剤師の協力を得る自治体もある。参考にしてほしい。離島など人手が足りない地域には、医療機関が看護師らを派遣できるよう国の支援が求められる。

副反応についても丁寧な情報提供が欠かせない。接種部位の腫れや発熱は一定の割合で起きる。高齢者が不安に陥らないような助言が必要だ。

ワクチン接種は個人の判断に委ねられ、医学的な理由で受けられない人もいる。接種しない人が差別を受けることがないよう、国や自治体が積極的にメッセージを発しなければならない。

菅義偉政権は、ワクチン接種をコロナ対応の「切り札」と位置付けている。感染対策の最前線に立つ医療機関や、業務が増える自治体の声に耳を傾け、ワクチンの円滑な接種に責任を持つべきだ。